秩序と関係に関する
33 の覚え書き

慶應義塾大学病院 予防医療センター
吉田　諭史

2023 年 8 月～ 10 月
思考の記録

本稿は NPO 日本消化器がん検診精度管理評価機構の中原慶太 副理事長から同機構の第 33 回 学術集会「胃がん X 線検診精度管理の根幹 画像精度」においてパネルディスカッションの司会のお誘いをうけ，準備の過程を経ながら書きつらねたものである．同機構の水町寿伸 副理事長の誠実で実直な作業がなければ，書き進めることができなかったものでもある．
ここに記して，お礼申し上げます．

秩序と関係に関する 33 の覚え書き

目　次

1.	” 基準 " に関するある日の短い一考察	P_1
2.	定義の陰と陽	3
3.	相対と絶対，自然と文化	5
4.	形式知と経験知	7
5.	教養を支える知と技術を支える知	9
6.	文化秩序と自然体	11
7.	部分と部分のあいだ	13
8.	意味の集まり	15
9.	意味の実体と差異	17
10.	自戒 _ 秩序の内と外	19
11.	秩序とコミュニケーション	21
12.	コミュニケーションの中断	23
13.	メリハリという意味のコントラスト	25
14.	平面と立体の交関体系	29
15.	方向性	31
16.	禁止の一撃と抑圧による整流	33
17.	秩序の構造	35
18.	規則性の差	37
19.	メタの関係	39
20.	秩序の相互作用	41
21.	文化秩序と人間の欲求との関係	44
22.	秩序のありかた	47
23.	余剰をめぐる問題提起	49
24.	失われつつあるもの	51
25.	主観と主観のあいだ	53
26.	濃度と秩序との関係	55
27.	コントラストと秩序との関係	57
28.	鮮鋭度と秩序との関係	59
29.	粒状度と秩序との関係	61
30.	範囲と秩序との関係	63
31.	角度と秩序との関係	65
32.	鮮明度と強調効果と障害因子と	67
33.	秩序構築における前提の役割	69

1．”基準"に関するある日の短い一考察

「ダブルスタンダード」とは，それを参照する者を混乱させるという点で，悪い意味に用いられることがある．しかし，こうした現象には，一種の誤解を伴っているように感じられる．これは，「スタンダード」には，基準とか，ふるまいのしかたとか，尺度のことを指すとともに，意識的かつ無意識的に変わらないものということが前提されているように思われるからである．そうではない．

何かしらの目的を掲げたときは，どうしても秩序あるいは法則みたいなものを定めないといけなくなるし，その目的を達成しようとすれば，言葉をもってそれを整理しなければならない．それが，ある時点での「スタンダード」である．また，それを展開するときには，どうしても美しさや醜さという審美の力を借りることが必要になる．

ところが，言葉や芸術は時間とともに変化する．それを創る者も，それを受け止める者の感性も変化する．変化は秒単位のこともあり，日単位，月単位，年単位のこともあるし，私達が今，そう認識していない時も，あとから振り返ってみると変わっていた，ということもある．そうであるから，

「スタンダード = 基準」とは，
目的を定め，ある目標に近づくために仮に固定した指標，である．
「ダブルスタンダード = 重複基準」とは，
仮固定した複数の指標を，ある空間やある時点で切り取った結果，である．

	性　質	傾　向
葉 枝 幹	直列の世界観 一方向性	同一性・理想・現代 差異の否定
	▲ 対立・相補・緊張の関係 ▼	
根	並列の世界観 多方向性	接合・切断・古代 差異の肯定

図：世界の構造とその関係

2. 定義の陰と陽

ヒトの特徴である言葉を使うという性質．言葉を使えなくなったときのことを想像してみれば，記号や音である言葉のありがたみとか重要性は，否が応にも理解できる．一方で，私たちが用いている言葉，そしてある特定の分野において用いられ意思疎通に便利な用語というものについて，それらのほとんどすべてが両義的で多義的であることに気づかされる．

例えば，「黒」．視覚的には黒い色を表す言葉であるが，「黒い噂」や「黒い心」など悪い状態とか不道徳という意味で用いられることもあるし，内部のしくみが複雑で理解が難しいもの（ブラックボックス）を示す時にも用いられる．逆に「漆黒の瞳」や「星を際立たせる一面の黒い空」のように，特定の文脈では肯定的に用いられることがある．やっぱり，言葉は両義的なものだし，誤解や無理解の出発点とも言える．

これは，言葉が，その時の，その場の，そのヒトのものの見方とか考え方が現れる鏡だからであろう．書きたくない・話したくない，という心理は，鏡を見たくない・見られたくないという心理に近しいものがある．けれど，言葉も鏡もそれがなければ，伝えることができなくなるし，写すことができなくなる．書く・話す，そして言葉を定義しこれを共有するという行為が，終わることのない永遠の作業であることを承知しておかなければならない．

能動と受動が，ヒトの宿命であり叡智であり醍醐味でもあることをふまえ，今の私達にひきつけて，”画像”とか”写真”とか”用語”という言葉の定義を考えてみたのでここに呈示する．

画像・写真・用語の定義

画像：

ヒトが感覚し，特徴的な形式にあてはめて，創り，表示するもの

写真：

ヒトが感覚し，特徴的な形式にあてはめて，創り，表示する，対象のありのままの記録

用語：

ある特定の分野において，物事=現象を，区別したり考えを伝えたりするための記号や音

図：スーパームーン　2023年8月31日

3. 相対と絶対，自然と文化

絶対とはヒトとヒト，モノとモノの外部にある価値のことで，普遍あるいは不変という意味がある．絶対的な存在があるのか，という問いについては保留しておくこととして，一般には，現在・過去・未来とか，何時何分何秒といった時間の概念や，天と地，右と左，前と後といった空間の概念は絶対あるいは絶対的なものと考えられている．つまり，これらは自と他の外にある普遍の価値のことであり，この枠組みがあることによって，異なる国や地域，異なる文脈であっても，事物と事象を比較することができる．

この発想は，古代，モノの世界にヒトが誕生した刹那，その混沌とした自然に自然発生的に発生したものと考えられる．秩序を形成するための第1段階なのであろう．原初の活力を整流し，加速し，安全を図るという試みが，幾度もくり返されて文化という名の秩序が形づくられてきたのだと思う．

相対とはヒトとヒト，モノとモノの内部にある差のことであり，かつ，互いがなくては成り立たないという意味を内包している．例えば，色という絶対概念のうちの赤と青，面積という概念のうちの広いと狭い，高度概念のうちの高いと低いという私たちの認識は，どちらか一方の認識があってこそ成立するのである．赤があるから青があり，広いがあるから狭いがあり，高いがあるから低い，と認識する．

このような文脈において，相対というものの見方や考え方は，絶対というそれがなければ存在しないし，「絶対」が「相対」に先立つ，という言明も成り立つことになる．

がしかし，私は，「絶対」があったのちに「相対」が生じたとは思えない．なぜならば，混沌とし，それゆえにありありとした活力をもっていた原初の自然を整流するために，ヒトが「絶対的な何か = 絶対」というしくみを取り入れた，と考えているからである．絶対とは二次的な

抽象概念である．

「相対」は「絶対」に先立つ．

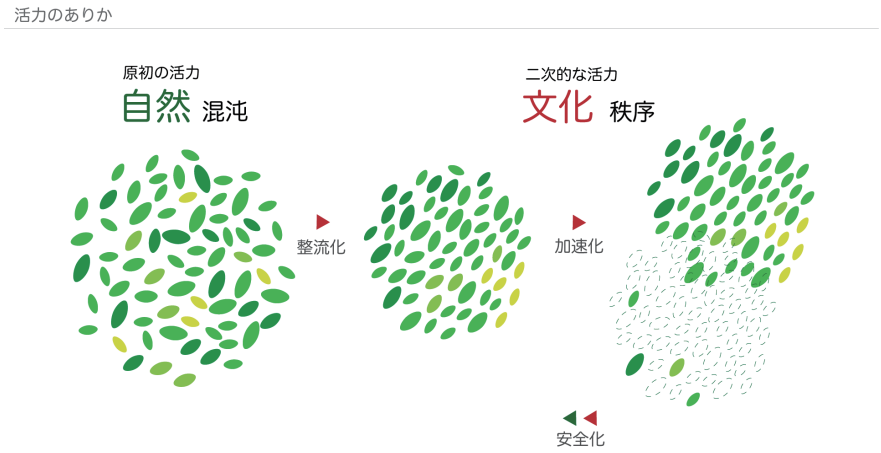


図1：活力のありか

相対は絶対に先立つ

前　提

1. 差異（D）は，相対（R）比較することによって見いだされる（R →〈時間〉→ D）．
2. 自然（N）とは，差異（D）そのものである（D ≒ N）．
3. 自然（N）は文化（C）の前にある（N →〈時間〉→ C）．
4. 文化（C）を構築することは，絶対（A）概念を世界に組み込むこと（C ≒ A）．

論　理

R → D ≒ N → C ≒ A

結　論

R → A 「相対」は「絶対」に先立つ

批　判

N ≒ A　自然を絶対視している

N ⊂ A　自然を絶対的なものと捉えている．

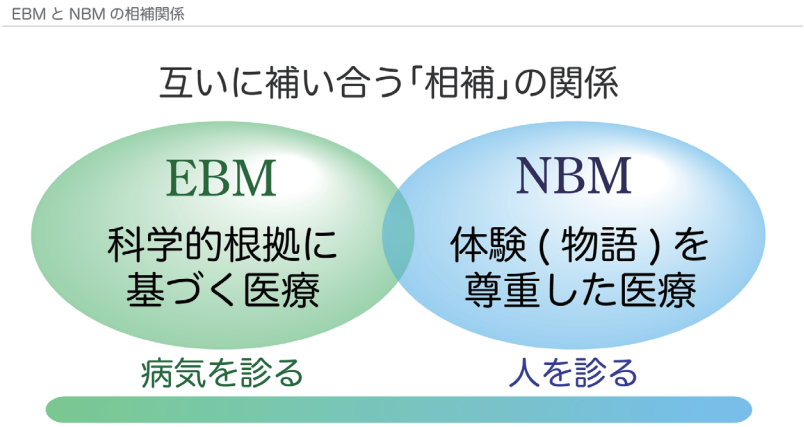
図2：「相対」は「絶対」に先立つ　を導いた思考の流れ

4．形式知と経験知

知は大きく形式知と経験知の二つのカテゴリに分類されるという．

形式知とは，文章，表，図のほか様々なデータベースやそれから導かれた統計などの方法で表現される知識を指す．つまり，文字情報，数字情報，画像情報として形式化されているので，情報を共有したり，利用したり，伝達したり，必要なときは更新したりすることができる．「書く」ことと「読む」ことによって育まれる知識であり，静的な学びによってこれを支えることができるように思われる．

対して，共有や伝達のしにくさ，という意味において非形式的である経験知とは，実地の経験や現場の直感に直結した知識であり，身体性というものと切り離すことが難しい．心と体が一体となった時，得られ，現れるからである．けれども，伝え・受けめることができないというものではない．「話す」ことと「聞く」こと，そして「やってみる」ことで培われる動的な学びに根ざしている．



図：EBMとNBMの相補関係

図：EBEとNBEの相補関係

今，書いたように，形式知と経験知は二項対立の関係にあることから，場合によっては緊張を生み出す引き金になることがある．

が，そうであるが故に両者は補完しあう関係にもあるといえる．形式知は構造化された情報を個人と組織に提供し，経験知は脱構築的に実地の知恵をその場に提供する．つまり，何かしらの問題を解決したり，何かを創造するときに，形式知 ⇄ 経験知の関係は，実践の文脈に置くことができる，と考えられる．

5. 教養を支える知と技術を支える知

二者択一．両者のうち，どちらを選択するのか．

試験問題なら何としてても選ばなければならないけれど，私達が直面するすべての問題に論理的に答えを出すことはできないように思われる．がしかし，私達が生活していくということは，二つ以上の選択肢のなかから自分自身で一つを選びとって，あるいは誰かに選択してもらうことによって成りたつ，こともおよそ確かなことである．

そして，選択するということはある種の責任を伴っているといっても大筋間違いではない．責任を負うことが嫌だ，という声が聞こえてきそうだが，過剰なストレスを回避するには「行動すること」と答えておくことにしよう．ひらたく言えば，「サッサとやること」である．感じていたストレスの大半がなくなる．

さて，冒頭に掲げた表題を選択肢として眺め，必要性とか善悪とか良し悪しの観点からいずれを選ぶのか，と問うたとき「いずれでも良い」，「いずれも正しい」，「いずれも必要」と感じる人が一定数いることは論じるまでもない．その根拠は，私がその一人だからである．また，選択に悩み，選択すること自体を放棄する場合もあるだろう．さらには，問いそのものに魅力を感じない時もあるだろう．言ってみれば，「しらけ」の空気である．今は聞くことがなくなった「しらけ」だが，現在にも未来にも場の空気を表すものとして充分に通用すると感じている．こうした現象自体は憂うべき筋合いのものではない．「活気のある学界」を築くためにひたすら真理を探究してみたり，社会や組織の規範に自己を同一化し奮闘してみたり，あるいは改善・改革にめざめて組織や理論を再構築するよりは，そうした試みから距離をおき，すべてを相対化して眺めるしかたがあることは知っている．

そのうえで言うのだが，ここで評論家のように振る舞ってみたり，無関係を装ったりすることはいただけない．安全で安心な場所に身をおい

て他者を非難するという態度では，「知を得て，知を創り，知を使う」という知の力強さなど感じることはできないからである．それよりも，危険と背中合わせで，危険を回避するための感性を磨き，それでいて批判的な精神を養い続けることが大切だと思う．それには，ある人や物事にのめりこみ，時には離れること．こうした対立・相補・緊張の関係を続けることが活力の源泉になる．

こうした文脈において，究極の選択に答えるとどうなるか．手段や技術としての知が，教養としての知を上回るとは思えない．私は教養という言葉が嫌いだから，規範としての知と言い換えてもよい．規範は技術を包括している．

いや違う．規範は技術に先立つ．

6. 文化秩序と自然体

自然そして自然にあるモノは，それが存在する場として「固有の環境」を持っている．

森や木，海や川，動物と植物がそれ自体で，かつ，互いに調和している世界がそこにある．また，人が人工的に創りだした建物や機械や器材のほか，絵や写真，音楽や香りといったものもまた調和を目指した世界ともいえる「擬似的な固有の環境」をもっている．擬似的固有環境は，自然に，ではなく，人工的で擬似的で模倣的な文明や文化なので，それに触れる者は様々な感想を持ち，それを改良したり新たな開発を続けるのである．調和への意志の現れ，である．けれど，調和を予定していてもそうならないことがあるのは，文明や文化が本当の自然のありようとは異なっているからだろう．

意識的・無意識的に何かを創り続け，壊し続けるのが人のありようである．なぜか．

人は，自然の秩序を模倣しつつ，しかしあくまでも自然の秩序の代替物として文化の秩序を生み出そうとするからであるし，文化の秩序を創り，保ち，変え，壊すことで人は安心するからである．「言葉でものを考える」という人の特徴は，「整理すると安心する．落ち着く」といった人の性質や美を求める本能と直結している．

こうしたことは，文化秩序が形づくられる背景にはその時と場に恣意性が働く，ということに帰結する．ここで言う恣意とは，わざと行う故意，とは違い，任意とか随意に近く，非自然的なものであり，ある文化やある秩序の中に生まれ育つ私どもにとって，こうした恣意性に根ざした秩序は，当面，必然性をもって目の前に現れる．

問題に直面する人にとっては，自然の秩序に変わるような何かしらの

秩序を構成することなしには問題を解決することができず，ものごとを整理するための非自然的で文化的な秩序が不可欠になる．そうした秩序の根拠は何か，と問われた場合には，恣意性であると答えよう．恣意的に打ち立てた秩序は，それに大義があり，権威づけされればされているほど，人々の目には必然性をもって現れる．

そして次の刹那のほとんどで，それに沿うものもいれば，それに対して違和感を抱いたり，異論を唱えたりする，といった現象が現れる．

文化の秩序と自然の秩序は根源的に異なっている．整理と創造の意志のもとに構築された律動装置である反面，多種多様な恣意を制限してしまう反動装置が非自然的な文化秩序である．以上のことから，自然体であることを旨とし，自然に振る舞う，ということは，能動し受動し，時には不動で，場合によっては反動を厭わない調和姿勢のこと，と考えられる．

7. 部分と部分のあいだ

自然環境に観察される様々なモノ_要素は，「有る状態から無い状態へ」，「生成から消滅へ」といった空間的・時間的な方向を持っている．これが自然が有する矢印である．各々の矢印には，人が持っているような意志は伴っていないわけだから，“あるがままにある”とか“なすがままになす”といった趣と原初の必然性を携えてモノ_要素は存在する．自然にある，と言って良い．

対して，二次的に創られたモノ_要素や制度やしくみとして現れる文化秩序は，別稿で論じたように非自然的で非必然的な恣意により構築されている．ここで，二次的な秩序を構築している要素や部品を部分と呼ぶことにしよう．自然ではない二次的なモノの全体は，ある目的や目標を目指すという恣意の矢印のもとに，個々に差異のある部分によって組み立てられることになる．部分，そして部分と部分の関係には，自然性や必然性はない．恣意的に部品を選択し，部品と部品を繋ぐことによってひとつの秩序が生み出される．モノを繋ぐという恣意的操作を抜きにしては，秩序を成り立たせることはできない．

文化秩序は必然の関係をもとに創り創られるのではなく，モノとモノ，ヒトとヒトの相関によって成り立っている．相関とは，一方が変化すると他方も変化するということを示唆する言葉であるとともに，擬似的固有環境の特徴でもある．この特徴が，同じ類に属する事物であっても，私達の目の前には多様な現象として現れるということの根本理由である．

ひいては，私が知る碩学とその学派が，事物の関係性を見極めるための着眼点として指摘した「共通点と相違点」というものの見方と考え方の根源もまた，関係（性）という大地に根ざしている．

留意すべきは，全体を成り立たせるとする意志や方向性には，部分を変化させたり，部分を取り替えることもやむを得ない，とする価値観が隣り合わせになっていることである．

図：自然を描いた絵

8. 意味の集まり

「信号」とは，青信号 → 進め，赤信号 → 止まれ， のように因果的あるいは相関的な関係を直接的に媒介するものである．小さく単純に洗練されたものであることによって，物事を共有しやすく迅速にかつ円滑に整流することができる．信号を介するA → Bの関係は，ふつう一義的で直線的な関係をもって，私達に刻み込まれている．だから，一般的に分かりやすいと評される．

図：日本万国博覧会 調和の広場 1970　太陽の塔 （岡本太郎）

四つの顔	黄金の顔	・・・・	頂部
	太陽の顔	・・・・	正面
	黒い太陽	・・・・	背面
	地底の太陽	・・・	地下

他方，「象徴」とは，間接的で比喩的な役割を果たすもので，鳩 ≒ 平和，赤 ≒ 情熱，丸 ≒ 調和 のように，特定の像を他の概念に変換する役割を果たす．感情や深い意味を伝えるためにある．信号が媒介するA →

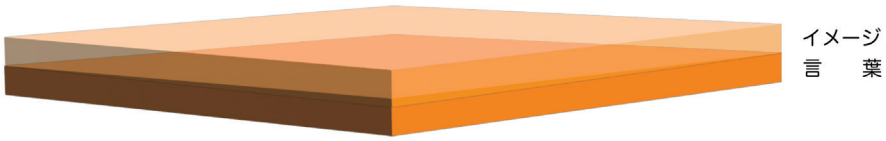
Bの関係と比べると，より大きく複雑であり，洗練されているか否かに関わらず，ゆっくり，しかし，じっくりと多義的で曲線的な関係を媒介する

鳩をみて不幸を連想したり，赤をみてどきつい色だと感じたり，丸をみて即座にバツを思い出す，ということもある．象徴を介した意思伝達が分かりづらいと感じられる所以がここにある．

信号と象徴．私達にもっとも身近な存在は，意味の集まりからなる言葉である．

9. 意味の実体と差異

平たく薄いゼリーの上に，もう一枚のゼリーを重ねたとしよう．上のゼリーは私達が感覚することができるイメージの連続体であり，下のゼリーはそれに対応する言葉である．今，格子状の金網で2層のゼリーを押し切ってみると，それによって生じる小さなペアが，それぞれのイメージに対応する言葉としての単語や文節や文章である．話し言葉と書き言葉の両方がある．ゼリーを3層に重ねて，上層を感覚されるモノ_客体，中層を感覚したモノ_主観，主体が表現する言葉_記号を想像してみてもよい．



図：イメージと言葉の重なり

このペアとなったゼリーを，すべて異なるものに切り分けるにはどうすれば良いか．

コンピュータのようなデジタル世界に倣い，このペアをピクセル単位やもっと細かい量子単位で切るという方法がひとつ．もっと大まかに2×2とか，5×5の格子になるように特注した金網で切る方法がひとつ．このほかにも，網目の形や大きさを様々に変えて，いろんな方法で意味のゼリーを切ることができそうである．

条件は「全てのペアを，それぞれ違う部分に分けよ」である訳だから，金網で切る者はゼリーの成り立ちの違いを前もって知っておく必要がある．そういうことが果たして可能なのかどうかは棚上げしておくことにして，うまくいかないときは初めからやりなおしである．

文化秩序の中にあって，ある目的≒条件のもとに，〈イメージと言

葉〉あるいは〈客体と主観と記号〉をいっぺんに切り分ける役割を担うモノが金網という恣意の道具である．

恣意とはヒトがもつ性質であり，ヒトは言葉でモノを考える．文化の秩序は，意思伝達の記号である言語によって，言語を通じて，言語として構成される理由がここにある．

意味のゼリーを切るときの心構えというか結論をもうひとつ．

金網の形にも，ゼリーの重ね方にも必然性はない．古い金網を使っても良いし，新調してもい．ゆっくり切っても良いし，すばやく一気に切っても良いのだが，異なる意味をもつ実体を差異という金網で分節し整理するというシステムは，これまで見いだされてきたシステムとは異なる新しいシステムであることをはっきりと意識しておくことである．

10. 自戒_秩序の内と外

ほんとうの自然には恣意がない.

対して，雑木林や竹林などの人工林が多くを占める里山のように都市や集落に近いところにみられる二次的自然にはそれがある．ヒトが何かしらの目的をもって一時的な自然を利用した結果が里山という風景である．里山とは自然に人為が加わることによって創りだした総体である.

こうした文化は，自らの恣意 ≒ 人為 により成り立っているにも関わらず，それを「忘れる」というしかたで，文化が生成された過程を自ら不完全に消去する．そのうち，生成された文化圏に住むヒトは，「慣れる」という方法で二次的自然と一体になって暮らしはじめる．ヒトの性質のひとつ，順応作用である．不自然さを自覚する者は一部の者を除いてほとんどいないので，〈日記〉とか〈書物〉に記録しない限り，その過程を思い出したり，歩いた道を問うたりすることは無くなる.

そういう訳で，全体のなかの部分に過ぎないある文化秩序は，自身の内部を充分に詳らかにすることなく，それがさも当たり前であり，絶対であり，全体であるかのように振る舞うことになる．かくして秩序は加速する．目的を達成するために秩序を創り，維持するためにギヤを入れる．これが，問題意識をもつヒトの性であり，宿命なのだと思う.

注意を要することは，あらゆる空間と時間的要因がひとつにまとまり完結した共時構造体ないしはその分析は，その外部に残された領域を視野の片隅に追いやる，ということである．正しく言えば，追いやらざるを得なくなる，ということである．二次的自然である文化秩序を創り，それを維持しようとせんがために，問題の解決や目的の達成という大義と文化社会の構成員としての名文に，若干の違和感を感じつつも乗じてしまうこと，である．勇気と蛮勇との境目を瞬時に判断することは難しい.

だから，

「文化を支える規律という秩序」,「あったとしても機能しない制度」,「今はないけれどもあったほうが良いと考えられる施策」，そして「現行のそれに含むことができなかった自然的因子」のすべてを新しい秩序に組み入れようとするならば,「秩序の構造」そのものを脱構築しなければならない，ように感じられるのである.

良くも悪くも相互に監視され，ひとつ間違うと顔の見えない他者から糾弾されたり，されるかもしれないという不安に満ち満ちた現代文化社会に住む私達は，秩序という監獄に閉じ込められていると言える．ゆえに，私達は監獄の外に出て，秩序の内部と外部の関係や秩序を維持するための活動を洗い出し，活動の根拠を振り返る必要がある.

11．秩序とコミュニケーション

目に見えるという意味においての具象と，ふたつ以上の事物や事象に共通する要素を抽出した抽象．この両方を像_イメージと呼ぶことにすると，文化秩序はイメージと言語が1対1で対応していることに根ざして構築されるのであった．私はこの言明について少なくない疑問を持つもつ者ではあるが，当面，この流れに沿って著述を進めることにする．

完成し公開され，ヒトの眼にふれることになったひとつの文化秩序は，時間的・空間的に異なる別の文化との相互作用によって生成されたに違いない．もちろん，別の文化秩序を知らずに独自の文化を創る者もいるだろうが，そうした秩序の共通点は，自然が自然の秩序を運営するために自然に刻んでいるシナリオとは異なり，文化秩序を定め維持するためのシナリオを常に書き換え，再確認し続けるという作業が要求されるという点にある．これが，文化社会に広くみられる構築と生産，そして脱構築と再生産という反復手続きである．

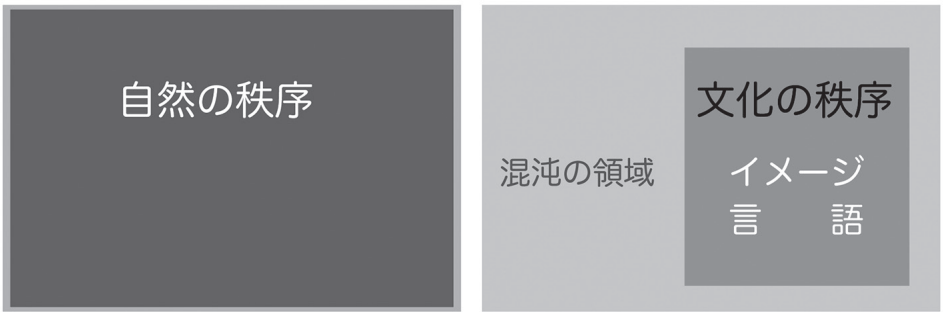
それは何によって行われるのか．

言うまでもなく，自と他の意思伝達や意思疎通である．コミュニケーションである．

イメージと言語がコミュニケーションの道具であり，その交換がコミュニケーションの体系である以上，自と他の間で交わされる言葉の交換がなくしては，秩序が成り立たないという点には疑いようがない．文化秩序という抽象概念に自ずと含意される意味ないし価値とは，自他が社会的なしかたで相互に関係づけられることによってのみ構築されるのである．こうした関係によって織りなされる総体という構造のなかで，ある言葉やある文章の意味や定義が収斂される．

同じことを別に言えば，言葉の意味は絶えず確認され続けなければならない，ということである．一個の主体あるいは一群が，他者と意思伝

達や意思疎通することなく，ある言葉に独自の意味を付与したり価値を定義したりしても，文字通り「意味をなさない」.



図：自然と文化のシナリオのありよう

12. コミュニケーションの中断

コミュニケーションが閉ざされるときは，主体と客体の両方，あるいはどちらか一方が感覚を閉じたときである．

事物と事物のあいだではヒトが行うような言葉の交換は（ふつう）行われないので，この検討対象は，①ヒトとヒト，②ヒトと事物のあいだにある関係となろう．いずれかが感覚を閉じればコミュニケーションは中断する．

本を閉じたり，暗闇の中で事物を認識しようとしたときは，本の表紙や事物を覆う暗闇とヒトは相対することになるわけだから，「関心を持つ」というヒトの感情が客体とのコミュニケーションを駆動しているものと考えられる．よって，私はコミュニケーションという言葉を以下のように定義したい．

関心の有無によって規定されるヒトとヒト，ヒトと事物との間の言語ならびにイメージを介した種々様々な程度の交換様式のことであり，文化秩序を創り，支え，変え，壊すエネルギーのこと．

では，コミュニケーションを中断する/されるときは，どのような時なのか．

国と国，集団と集団，人と人，そしてヒトと事物の間の交換の中断は稀なことではない．これは，関心を向けることを止めあるいはそのように装うことで，主体自身が影響しまたは影響されようとしているヒトと事物との関わりを何かしらの理由で回避しようとする意志の現れ，なのだろう．秩序を維持しようとする意識の現れ，とか，変化を厭い恐れるという感情の現れとも言える．これは，「他人の身になってみる」という表現が示すとおり，互いが互いに危険を察知し，取り返しのつかない破綻を免れるための安全装置を作動した/させた状態，でもある．

逆に，秩序の絶対化というイデオロギーの発動様式として，主体と客

体との交換を止める，ということもある．変えない・変わらないことを使命とし，裂け目のないしっかりと編み込まれた膜に内部を包み，外部との関わりを絶ち，主義・主張を貫くという姿勢である．主体と隣り合わせの文化秩序を守り抜くという信念のためには仕方ないことなのかもしれない．

がしかし，ここで問わなければならない．

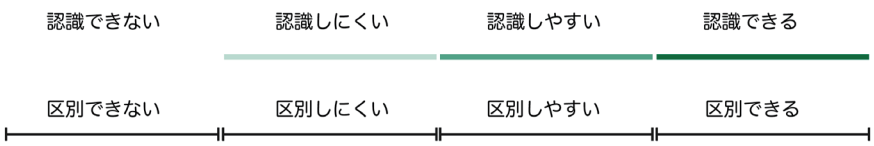
なんら外部との交換のない閉域というものは，有機体を構成する組織や細胞と同じく，消滅することを免れないのではなかったか．自然にみるようなバランスや過去の歴史を楽観的に眺めることは諦めるとしても，揺れ動きつつ，時には熱く，時には冷ややかに，動的な平衡を保つための呼吸を続けることが私達の役割なのではなかったか．

13．メリハリという意味のコントラスト

目の前に同時に二つのものがあるとする．それらが同じものなのか，違うものなのかを見分けるにはどうすればよいか．差である．差がなければ二つは同じものと見做さざるをえない．差が有る，と断定するには差を見いださなければならない．このことは，実体の有無の概念にも拡張することができる．実体が無いことを言うには，実体が有るという現象を前もって知っていなければならない．認識レベルにおいては，「有る」は「無い」に先立つ．本来はそこに有るものが無い，とか，本来はそこに無いものが有ると認識するとき，私達は先験的に有るという状態を知っておかなくてはならないのである．無いという概念が有ることを，前もって獲得しておかなければならない，とも言える．

「二つは同じものではない．両者を認識する時間の差があるわけだから，常に違うものである」とか，「両者には空間の差があるわけから，二つは常に同じものとはいえない」などという声が聞こえてきそうだが，そういう批判にはこう答えたい．
「時間や空間が異なるからといって，事物は常に変化しているという論理を認めるとするならば，ある時ある場所で生起したものを，私達は評価することができなくなるでしょう．また，時と場所が記録されていれば，事後的にそれを区別することができます」

何かを見比べようとするとき，なにかしらの差をもって区別するというしかたは私達にとって一般的なことである．差を認識しやすければ区別しやすいし，認識しづらければ区別しにくいのである．



図：事実に対する認識と区別

1．数学的な観点からみた差

2つの数値または量の間の差異を表す．これは，基本的な演算であり，2つの数値の差を求めることで，量的な比較や変化を認識することに役立つ．例えば，2つの整数の差は，それらの数値の間に存在する量的な差を示す．

2．哲学的な観点からみた差

差は現実の複雑さと多様性を強調する概念として扱われている．差異がなければ，意味や価値は形成されないという考え方のもと，ジャック・デリダは、「差延」（différance）という概念を提唱し，言葉や記号が意味を持つ際に、他の言葉や記号との差異が重要であると主張した．

3．社会科学的な観点からみた差

差は人々の社会的な属性や状況の違いを指す．これには性別，人種、階級、文化的背景などが含まれ，差異を理解することは，不平等や社会的正義の問題を議論する上で欠かせない．これらの差異が社会の構造や個人の生活に影響を与えるからである．

4．文化的な観点からみた差

差は文化の違いや多様性を指す．言語，宗教，習慣，価値観などが文化の差異を形成する．これを理解し尊重することは，異文化間のコミュニケーションの基盤になる．

5．個人的な観点からみた差

ありとあらゆる個人の違いを指し，性格，経験，価値観などが含まれる．差異があるからこそ，個人のアイデンティティが形成され，他者との関係を構築することにも繋がる．また他者の視点から問題を眺めることは，新しいアイデアや解決策を生み出すことに役立つ．

差異は，私達が様々に異なる文脈において世界を理解し，他の人との関係を築き，社会を維持したり改善したりするために役立つ視点である．以上のことから，自と他のコミュニケーションには，**メリハリがあるという意味においての”コントラスト”**が求められていると思う．コントラストがよければ，認識しやすいし区別しやすい．

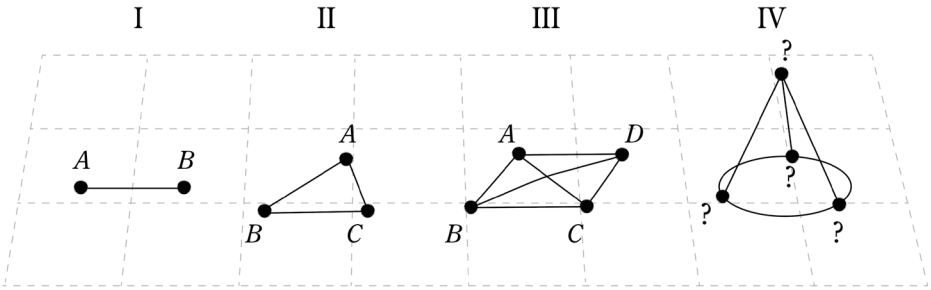
ここでいうコントラストとは，写真や心情表現に用いられるコントラストという意味ではなく，それを含めつつ，すべての現象を包括でき，そしてその差異を見極めるために不可欠な概念のことである．

図：箱根町小涌谷　2023年7月16日

14．平面と立体の交関体系

点と点とを繋ぐ線．要素と要素とのかかわり．これが関係の基本様式である．その様式には，(1) 因果，(2) 相関，(3) 緊張，(4) 相補，(5) 対立，(6) 依存，(7) 上下，(8) 包含，(9) 利害・・・など様々なものがある．このほか，要素間に直接の結びつきがない (10) 無関係 という関係もある．歴史民俗学にいう，往来すること・交易すること・トレードすること，に倣えばこれら関係様式を総じて，交関体系と呼ぶことができよう．

この視点をもって交関体系の構造を分析するならば，その基本型は図のようになる．



図：交関の基本4型

注目すべきは，2つあるいはそれ以上の要素が平面に展開した状態のI〜IIIである．これらの型は，要素が増えるほどにそれらを接続する線の数が指数関数的 ― n(n-1)/2 ― に増える．整理の観点から眺めてみれば，余程うまく整流されていなければ，これらの諸関係は絡まり合い解きほぐすことが困難になる．だから，二つの要素とその関係からなるIや，それを三つの要素に拡張したIIが，整流手段の基本になるのであろう．

ここで，注意が必要である．それは，I の中にも，II の中にも，IIIと同じく平面展開構造が組み込まれている，という点である．また，先述したように交関体系を成す様式には多様なものがあり，要素が少ないからといって複雑さを回避できるとは限らない．

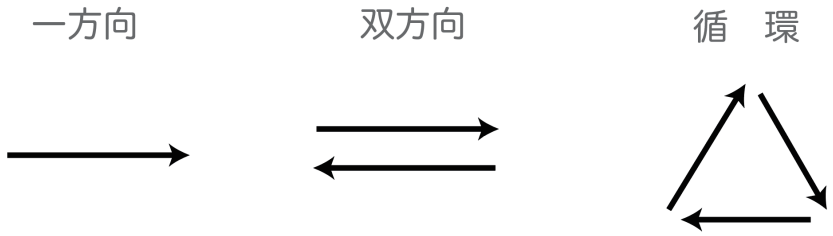
だから，私達は水平方向あるいは平面的に展開された要素の一つを恣意的に垂直方向に転置することによって，混乱を整理しようとするのかもしれない．これが秩序を生み出す知恵だとすれば，このときの中心要素の選択は，他の要素とは意味の次元や層が異なっており，かつ，他の要素のすべてと同じ関係をもって接続することが条件となるように感じられる．

なお，IIIからIVに変化するとき，中心要素となる候補？には，直接プラス方向に転置するルートと，いったんマイナス方向に転置した後，他の関係をすり抜けるように垂直に立ち上がる2種類のルートがあることを付言してきたい．

15．方向性

交関の体系は，ヒトとヒトとの往来やモノとモノとの交換などによって成り立つものであった．意見の交換や，貨幣と商品の交換もこれに含まれる．これを矢印で示せば，矢印を上下に二つ並べることになる（図中）．矢頭と矢尻が互いに反対の方向を向いているという点からは，相互性とか相補性という意味があるようにも見える．これは，要素Aが，要素A’とか要素Bに変わるといったような可塑性とか，要因Aによって結果Bが導かれるなどというような因果性などの意味内容（図左）が，矢印という記号に付与されているからであろう．

このほか，矢印には線の太さや長さに様々なものがあることから，本記号とは総じて量と向きを示すものと言える．



図：矢印の意味と関係

矢印が違いに角をもち，三角形をなすものが図右である．矢印の数を多くすれば，全体として多角形や円環が描ける点からは，本図は交関体系というものを一般化した基本型であるといえよう．それゆえに，この形に交換の循環性という意味をも見いだすことができる．三角形を，n角形に拡張すれば，即座に多数 ― n+n(n-3)/2 ― の矢印が立ち現れる．これは，断章：基準に関するある日の短い一考察に呈示した，多方向性を有し，差異を肯定する世界観と同じである．「根」では，地面という平面からは見えにくいけれども関係の接合と切断が脈々と進行して

おり，「根」とは，「幹」・「枝」・「葉」を支えるためになくてはならない部分である．思い出すべきことは，こうした世界観と対立・相補・緊張の関係にある世界が，たしかにあるという側面である．一方向性を有し，差異を否定する傾向をもつ世界であり，ここでは，同一性とか理想像が語られることになる．

こうした文脈において，あらためて循環の基本型を眺めてみれば，ここにはすでに，“一方向”という契機が含まれていることに気づかされる．一方向の矢印には，先に述べた因果や変化とは別に，交換ならぬ贈与や，逆ではならぬといった禁止という意味内容が包摂されている．整流である．すなわち，交関の体系をふまえつつ文化秩序を構築するには，循環と整流の両者が求められるということになる．

16．禁止の一撃と抑圧による整流

新しい文化秩序を創造するには，聴覚や視覚に裏打ちされた要素_伝達記号を介して，要素と要素間で「ものの見方や考え方」を取り交わすしかない．「伝える」 → 「受ける 」という取り交わしにはテレパシーとか，アイコンタクトなどがあるけれども，ヒトとヒト，ヒトとモノの間で意味内容をとり交わす際には，およそほとんど，言葉やイメージを迂回しなければならない．発信者と受信者を媒介するもの．これが，交関体系における伝達手段としての記号の役割である．これがあるからこそ，一方向的，双方向的な情報伝達ができる．

記号はすべての要素を超越している．

このことは，交換体系の全体は常に動いているということにも接続しうる．ヒトや事物は静止したように見えていたとしても，対象を認識するのは常に，それを見る人の心のうちで形作られ濾過された結果であるし，人の心は常に変わるからである．揺らぐ，と言い換えても良い．見る人としての主体の特性は，時間とともに変化し，揺らぐ．だからといって，見られる人や事物としての客体が常に変化し揺らいでいては，今ここに求められている文化秩序を構築することはできない．

ここまでで，私達はすでに秩序の根源に相互性ではなく，抑圧的で禁止的な一方向性とその必要性を見出したことになる．「伝える」と「受ける」に挟まれた矢印．これである．

この矢印には，時間が一方向性に流れる，という一般性質が刻まれている．また，本性質と密接な因果関係を示す記号として用いられることもある．すなわち，時間は逆流しないこと，原因と結果との関係は逆ではないことが前提されているのである．矢印には，進行や関係を表すと同時に，禁止と抑圧も表している．

例えば，私達の世界にひきつけてみると「図に表す」ということは撮影すること，「言葉にする」ということは読影することの隠喩である

が，「伝える」と「受ける」の間の矢印の向きを反対にすると，どうにもおさまりが悪い，と言えば良いだろうか．それではうまく整理できない．こうした議論から，私は，秩序の構築には，必ずどこかに禁止・抑圧の行程が不可欠だったはずだ，と確信するのである．

もちろん，構築の際には情報の共有が必要であることは論を待たないけれども，情報の欠落を恐れてはならない．すべての情報を正しく共有できる，とは思わないほうがよい．要素と要素が記号を迂回して情報をやりとりするときには，ズレが忍び込み，両者に剰余が生み出されるからである．伝える側が発する情報を，受ける側が理解したといっても，情報を正確に複製できているわけではない，ということである．

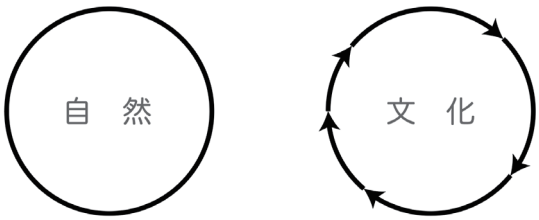
受ける側の経験に照らしつつ，経験に類似した情報として受け止め，整理し，それをテコに破壊と再生産，つまり新たな創造に向かうことになる．

17．秩序の構造

文化秩序が構築される過程には，言葉やイメージによって意味内容を共有するとともにに，禁止や抑圧といった整流行程を含まざるを得ない．だから，秩序に包摂することができなかった剰余部分は，その外部に定置されざるを得なくなる．これは，秩序の中心や要となる因子が析出したあとは，他の要素同士が直接的に相互関係を結ぶことに関して，一定の制約を受けるということである．

各々の要素が，自由気儘に強弱様々の関係を結ぶことを許容したならば，文化秩序の構築など望むべくもない．それこそ無秩序の状態に逆戻りすることになる．方向の転回である．

それゆえに，個々の要素が自然のシナリオに則し直接的に交換し，自然の円環に回帰しようとする力は，秩序構築のエネルギーと明らかに衝突することになる．「整然とした自然」を模した秩序構築を夢見ることはできたとしても，文化秩序が自然秩序にとって替わることはできない，のであった．だから，各々の要素や私達は，自然に存立することを夢に見つつ，文化の秩序に沿う習慣を身につけてしまったのであろう．そうであるが故に，「ではない」・「ならぬ」の文脈を何かしらの方法で克服したり，昇華したりすることができない時には，秩序の内部に存在することに居心地や座りの悪さを感じ，自発的に外部に移動したり，強制的に移動させたりするのである．



図：自然の円環と文化の循環

ところが，当該秩序の外部は，再び別の文化秩序あるいは混乱した世界である．秩序が何たるかを知ったうえで混乱の只中に身を寄せた要素は，― それが生(活)きている限り ―　方向性の過剰や欠如にたまりかねて，徐々に静かにエネルギーを蓄積する．これがKJ法の創始者である川喜多二郎のいう「はぐれ猿」である．はぐれ猿は，事前の秩序の内部にあることによって感じた居心地の悪さや違和感という感情をバネに，新たに意味内容という言葉を紡ぎはじめる．これが，文化秩序の循環にみることができる整流の徴候であり，新たな秩序構築の萌芽でもある．

以上のように，秩序と混乱はいつも隣り合わせになっている．注意しておきたいことは，秩序とは文化社会の深部ではなく，むしろ表面に現れていることである．確かに文化秩序の構造は，全てがあらわになっているとは言えないし，数々の秩序を解体し，新たな秩序を創造してきた歴史から見返すと，文化秩序というものは過去に積み重ねられてきた古層として観察されることも事実ではある．しかし，秩序一般の構造をみれば，それが表面に位置することを要請されていることには違いないし，そうでなければ機能しない．文化秩序は見えることによって機能する．

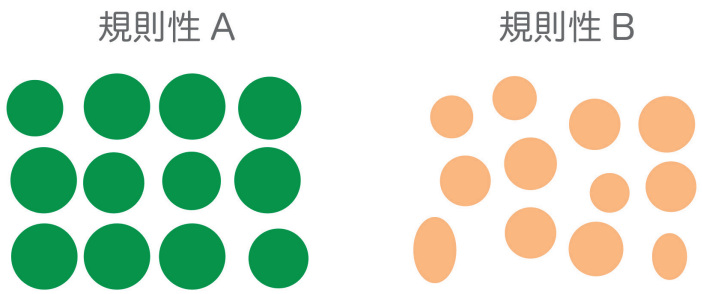
深部にあるものは，あの欲動である．方向性と言い換えてもよい．文化秩序と欲動は両接した二層構造を成している．

18．規則性の差

世界を見渡すと多くの文化がある．文化には人々が人々なりに世界を理解し，構築してきた独自の秩序や価値観を伴っている．このことは，人々が世界に影響を与えるよりも先に世界という環境があったということを意味しているとともに，その世界環境に，— 人間が — 二次的に特有の秩序と価値を付与した，ということを示している．そうした人間の意志が，秩序という枠組みを構築するのである．そしてまた，秩序は個人の行動を規制し，社会の安定と調和を維持するため要素でもある．これが私が考える，秩序の生成過程における個人と個人の相互作用体としての人間と秩序との関係であり，位置付けである．

文化の多様性は世界を豊かにする．と同時に，その多様性のためにしばしば衝突や生じることがある．文化構築の構造は同じであっても，それぞれに求められる秩序の形態に差異があるので，一つの文化で受け入れられる事物であっても別の文化では不適切とされることがあるし，ある文化では善とされる行動が，別の文化では悪とされることもある．ある文化が別の文化を受容するときも批判するときも，これらの差異の大小が問題となっていることからは，差異に着目することによってこそ，事実に即した分析が可能になる，と考えている．

また，ある文化秩序に住まう人間が，別の文化秩序のことを揶揄したり，レベルが低いと断じたり，矛盾を指摘したり，不正だなどと表現したりすることがあるが，そうした視座の基準は，そこに住まう人間に宿りやすい価値観に拠る，と感じている．ある環境を正常と捉え別の環境を異常と捉えるべきだという，私達の思考の悪癖が見え隠れしているように思われるのである．



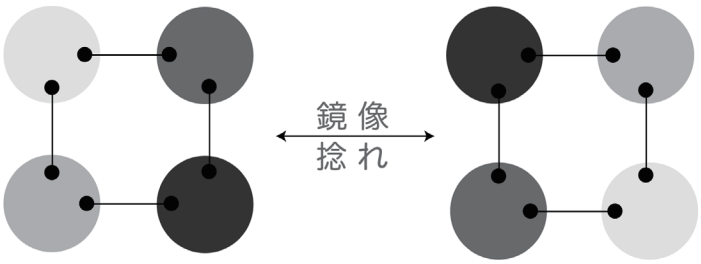
図：規則性の差

本来，異なる文化には，それを構成している各々の要素の大きさや形や配列の差が見られるのみで，その秩序とそれを構築する人間に優劣はない．文化とは，その構造の深部にある人間の欲動をもとにして，秩序が形態として表面化したものなのであろう．これを側面から俯瞰したものが，秩序の二層構造である．表面にはなにかしらの規則性が現れる．こうしたことから，形態学的な判断の基準は，まずもって「差異」に求める必要がある，と考えており，私はこのことを「規則性の差」と呼んでいる．

19．メタの関係

秩序は欲動を抑圧することによって，一見，静的な形態として確立される．一方，抑圧された欲動が欠如していたり，欲動のエネルギーが小さいときは秩序の形態は保たれたままであるものの，過剰なエネルギーを持つ欲動は秩序の隙間をうかがって表面化し，秩序の規則性を流動的に組みかえることになる．これが再構築や改築という現象である．こうした現象に迫ろうとするときは，ひとつの秩序の形態だけではなく，ある秩序と別の秩序との関係性や，秩序と欲動を貫く関係性こそ，分析されるべき真の対象ということができる．秩序は表面にあり，欲動はその深部にあることは既に述べた．

欲動の過剰と欠如として説明しうる秩序への侵入と無関心．これが，既存の文化秩序の形態を維持しようとするイデオロギーが最も嫌うところであり，逆に言えばこうした侵入と無関心に対して示す既存の文化秩序の拒否反応を手掛かりとして，正しいと捉えられてきた既存の秩序を解体し，構造を抽出する作業が真の分析方法である．あらゆる形態学が拠って立つところは，形態を分析しその構造を見いだすこと，と言えよう．



図：関係と関係とを繋ぐメタの関係

今，私はたしかに形態と構造とを区別した．辞書に倣えば，

形態とは，①モノのかたち，であり，②組織的に組み立てられたモノ

のかたち，である．

構造とは，①構成のしかた，であり，②全体を作っている部分部分の関係や個々の部分の作られ方，である．つまり，形態とは要素がもつ欲動の表象であり，構造とは要素間の関係性のこと，と理解しているのである．そうであるからには，形態として観察される個々の秩序を私達がそれを全てトレースすることは困難だとしても，要素間からなる構造には共通のパターンを見いだすことができるように思えるのである．そして，数種類のパターンもまた，ある関係とある関係の逆転とか捻れを発見したりすることによって，もっと端的な理論を析出しうる可能性がある，と感じているのである．なぜならば，秩序とはヒトがある目的に向かって構築したものだからである．いや，この文脈では，秩序とはヒトがある環境においてある目的に向かって構築したものに過ぎない，と言った方がよい．批判は覚悟のうえである．秩序と批判とが，鏡像と捻れをなしながら幾重にも積み重なったものが歴史である．

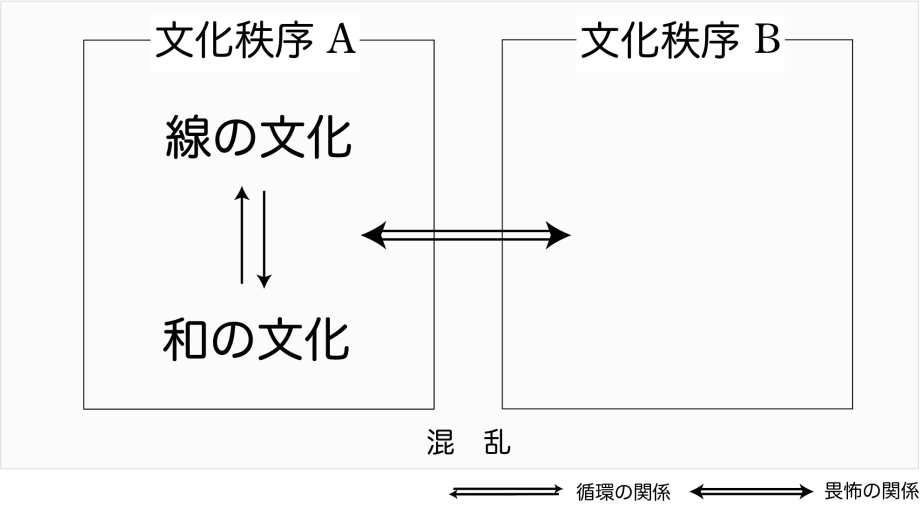
20．秩序の相互作用

私は基準の意味内容を語るにおいて，世界の構造とその関係をみておいた．基準とは，比べるときのもとになる水準のことであり，一定となる拠りどころのことである．それだけは満たされていなければならない，というきまりといっても良い．それゆえに，基準には世界に同一性を要請したり，差異を否定する傾向を孕んでいる．例えば，幹と枝と葉の関係のように，無数に見える枝分かれがあったとしても，原因と結果の関係のように事物を一方向性に整序するための始原が基準という言葉の意味に含まれる．これを，線の文化と呼ぼう

対して，並列の世界観もある．木の根にみるように，要素(点)と要素(点)との差異を肯定しつつ，多方向性に接合と切断をくり返し，いつのまにかいたるところに輪や面ができるといったものである．ここでは，これを和の文化と呼ぶことにする．

ここで，和の文化と線の文化，そして木の関係は，奇妙な対照の関係を成していることに気づく．1点目は，両者の文化は別々の性質や傾向を持っているものの，連続的で循環するひとつの系列に存在しているということである．木の成長に不可欠な水分や養分は，根から幹や枝にいたることによって葉が為る．葉はいつか枯れ，地面に落ち，あらたな養分となる．これが，自然の円環を模した文化の循環である．2点目はすでに述べたことだが，文化と木という本質が異なるふたつの不連続な系列の間にある比喩の関係である．連続と不連続．これもまた，世界の構造を表した関係性といえる．

さて，和の文化と線の文化の軸に，これと直交する他の文化秩序からの軸を加えたものが以下の図式である．



図：秩序の相互作用

秩序構築の原始である基準は，ある一つの文化の中で定められる．環境が人を育むことと同じように，文化が基準を定めると言ってよい．これは，ある時ある場所に忍び込む混乱の対局にあるもので，文化秩序の外部に混乱を放逐し，秩序を維持し加速するための根源的な役割を果たす．そしてまた，和の文化と線の文化の往来による批判の儀式にさらされることによって，その基準は洗練されたものになる．この文化世界にあって最も洗練された基準とは，ゼロの概念であろう．

一方で，異なる自他の文化秩序が相対するとき，この時空において発生するのは，外部に放逐したはずの余剰と，別に成立している文化秩序の再侵入である．侵入をみたとき，その背景にあの混乱があることを知りながら文化秩序に住まう人は，受容するか忌避するかの選択を迫られることになる．これが，相対する文化秩序の間にみられる畏怖の感情であり，関係である．同時に自己の文化秩序の深部にある欲動の過剰と欠如という奔流にもまきこまれ，文化秩序の構造は一時的に解消され，更新された姿でふたたび私達の目の前に現れる．更新された姿がどのような結果を導くのかは，今ここにいる私達には分からない．

文化秩序はその成り立ちからみて必然的に外部を伴わざるを得ないことは紛れもない事実である.

21．文化秩序と人間の欲求との関係

秩序を構築し維持する理由には，（1）集団に属する個人の保護，（2）個人的・集団的利用と付加価値の増大，（3）個人および集団の行動に対する規則性の確保，（4）個人に有益な体制の存続，があげられる．これは，社会を成すヒト集団がなぜいかにして形成されたのかを考察すれば，理解しやすい．今では希薄になった感があるけれども，孤立する個人は生活を自足できないので，生存に必要なものを獲得するために，集団による分業の必要性がこれを生み出したとする考え方には現代にも十分通用する考え方である．意識するかしないかに関わらず，ヒトには個人の生存本能とは別に集団を生存させる本能が備わっているものと思われる．ヒトが住まう場としての集団の効用であり，こうした考え方が，「全体は個に先立つ」論の理論背景でもある．家族がヒトや動物に典型的な集団の最小単位と考えられるが，それにもまた，その時々と場面に応じた何かしらの秩序が必要になる．

こうした状態を集団の内部にもたらす方法としては〈1〉秩序構築の目的の共有，〈2〉法の整備と規範の設定，〈3〉利害の調整と統制，〈4〉強制力の行使，がある．このうち，〈1〉の目的とは上述した（1）～（4）のことであり，これを目的レベルでの前提とすれば，秩序構築の大前提は，「集団における個人の生存のための自他の分業の必要性」といえよう．範列_パラディグムと連辞_サンタグムの規則に倣い，集団を個人の肉体に置換すると「生体における組織・細胞の生存のための自他の分業の必要性」ということになる．ヒトが有している欲動には様々なものあるから，分業を成立させるには，まず人間の欲求の成り立ちを理解しつつ，〈2〉～〈4〉を実行することが要求される．

実行するには何が必要か．第一義には集団を護る意志である．集団に属する個人を放逐するような行動は，直ちに排除されなければならない．

心理学者アブラハム・マズローが理論化した「欲求の5段階説」では，人間は，

「生理的な欲求」や

「安　全の欲求」という危険の少ない衣食住の環境などの，物質的な欲求を土台とし，

「社会的な欲求」，次いで

「承　認の欲求」，最後に

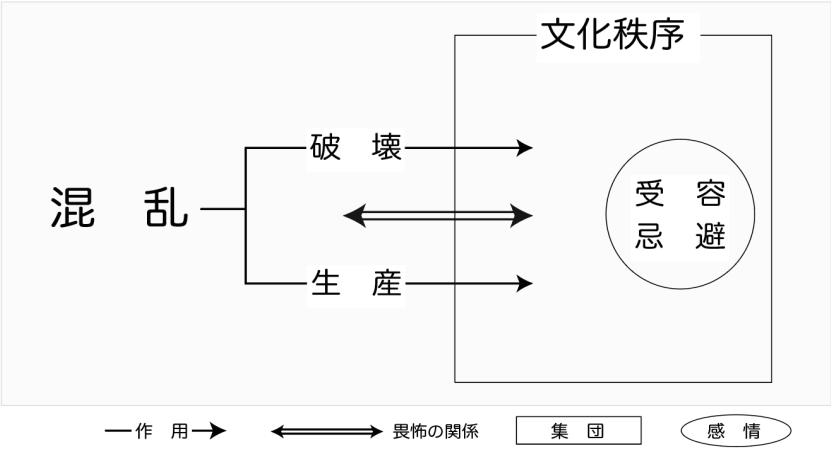
「自己実現の欲求」などの精神的な充実を欲する，というものである．

秩序を構築し維持する理由として掲げた（1）集団に属する個人の保護は，「生理的な欲求」や「安全の欲求」に対応するものであるし，（2）個人的・集団的利用と付加価値の増大と（3）個人および集団の行動に対する規則性の確保は，「社会的な欲求」と「承認欲求」を満たすために必要なものである．そのうえで，自己実現の欲求を支えるものが（4）個人に有益な体制，ということになる．

いま見てきたように，秩序の機能は，集団における個々の分業体制，から出発している．分業のためには自他の関係が構造化されていなければならない．目的に基づいて構造が機能していればその集団は正常な形態を呈し，機能していなければ異常な形態を呈することになる．正常か異常かを機能面で判断するということは，〈2〉～〈4〉のありかたを判断することと同義である．

こうしてみると，文化秩序の外部にある混乱や他の集団によって構築された秩序は，いつも文化秩序を否定し破壊する作用をのみ有している，とは言えないように思えるのである．外部に晒されながらも常にある一定の形態をもって集団がある，ということは，混乱には文化秩序を破壊する力とは別の作用を有していることは明らかである．

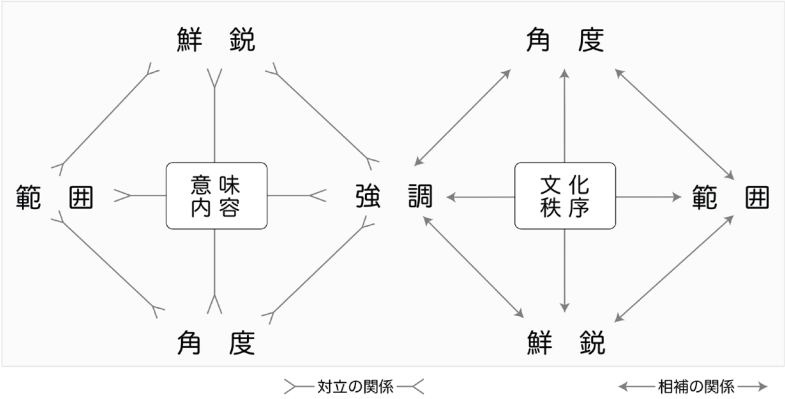
それが，文化秩序を刺激する作用なのであろう．混乱は破壊的でかつ生産契機ともなる．



図：混乱が文化秩序に及ぼす作用

22．秩序のありかた

人間が生活する場において秩序は極めて重要である．秩序があると事物が整然とし，互いが機能的になり効率があがる．秩序が欠如すると状況が混沌とし，意思決定ができなくなる．ここでは，ひとつの全体を部分に分けることの愚を承知しつつ，強調，範囲，鮮鋭，角度という4つの要素と秩序との関係に焦点を当てて，コントラストが良く鮮やかな秩序構築のありかたを論じてみたい．



図：秩序に纏わる4要素

1. 強　調

強調とは，何かを際立たせることである．適切に強調されていると，大切なことに焦点を当てることができるが，強調が過ぎると逆効果になることもある．不適切に強調すると，重要な情報が埋もれたり，情報を誤認する可能性が高まることがある．強調の過不足は，秩序に無用な濃淡を与え真実を修飾してしまう，とも言える．

2. 鮮　鋭

鮮鋭とは，明確で鋭いことである．なにかを整理すること自体が秩序構築の本質とも言えるし，鋭く的確な情報は集団に属する個人を護る．

粒ぞろいの情報は集団と個人両方の意思決定を助けるが，情報がぼやけていたり錯綜していたりすると判断がしづらくなる．情報の濃度が損なわれた状況では，大切な事柄が見落とされる可能性が高まる，と言えよう．

3. 角　度

同じ問題や課題に対して異なる視座や異なるアプローチを行うこと．多面的に情報を認識し処理する際に役立つのが，この角度の概念である．異なる角度からの情報を適切に収集できれば，情報を分析し統合しやすくなる．一方，その過不足は情報間の対立を招く．また，角度の過不足は，視視野を狭くし秩序の発展を阻害することもある．

4. 範　囲

範囲とは，対象や領域の拡がりを示す概念である．目標や役割の範囲を秩序立てて定義すると，問題を分析したり，思考の不連続性を予防したりすることができる．範囲が不確かになるということは，問題そのものを正面から捉えづらくなるということである．

以上に述べた4要素は，意味内容の点で相互に対立しつつも，秩序という時空間においては相互に補完的なものである．対立と補完から生まれるある種の緊張感をもって同時的に発揮した/された状態が，秩序ある全体像と言えるのだろう．自然科学の名において本論が排除されたとしても，これらを調整し統制することが秩序を維持するための一方法になる，と私は考えている．

23．余剰をめぐる問題提起

いったん構築された秩序を維持する過程においては，混乱を理由として外部に置かざるを得なかった余剰が，話し合いとか打合せという場において再び称揚されることになる．深部に欲動がある限り，周期的にこうした反復が起こることは必然のことと言えよう．秩序を構築している各々の要素と，それらの関係からなる構造はひとまず解消され，更新され再構築される．

言ってみれば，協議の場とは，秩序を創設した時の「恣意的な跳躍と急降下」の再演の舞台に他ならない．秩序と秩序，秩序と余剰，余剰と余剰の衝突劇はまさにあの日に見た光景である．自己の想像界に秘めた理想像を，意見という名の台詞を披露することによって象徴界に参入させ，他者との間で現実界との接点を探り続けることになる．

このとき，左右に位置するかにみえる極論は，弁証法的に昇華し解決される場合と，統一されたかのように見えて統合されないまま再び秩序の深部に埋め込まれる場合と，秩序の外部に放逐される場合がある．これが，更新し再構築された秩序である．混乱をくぐり抜け，その時々の共同体を安定させるための秩序の姿である．

それにしても，律動する欲求からなる混乱，そして既存の秩序に対する否定性は，秩序維持装置の作動シグナルとして機能するだけなのだろうか．そうではない．根源的だと考えられていた秩序を大幅に組み替えた代表的なものには，コペルニクス的転回（地動説から天動説へ）があり，こうしたことをアメリカの科学者・哲学者のトーマス・クーンは著書「科学革命の構造」のなかでパラダイムシフトと呼んでいる．ある時代や分野において支配的規範となっていたものの見かたや考え方が，否定性の名のもとに180度変わることは歴史が証明している．こうしてみると，外部や深部を伴わざるを得ない秩序は，周期的な協議による余剰の処理過程を辿ることによって維持されたり，破壊されたりする，とい

うことになろう．

これは，環境によって創られた個々人のものの見かたや考え方，そしてその表現のしかたによって，秩序や規範もまた変化するということである．また，それらはその時々によっても変化する．人には，一つのシグナルに対して一つの反応をする，というある種の生物に見られるような一貫性はなく，一つのシグナルに対して多様な反応をするという多様性が備わっている．時の流れに適応したり，変調させたりするために幾つかのモードを備えていて，異なった反応をするという能力が人には備わっているのである．異なる反応によって生成される秩序も異なる．当然のことながら，変化を嫌う者も一定数いる．

こうした者同士が集まって創られる秩序とは，ある秩序が肯定と否定と無反応とに晒されることによって洗練され，あるいは破壊されるための対象と言って差し支えない．それは，人間共同体が拠って立つところであり，かたや「偶然」という色に彩られている．

ここで，私が突き当たる問題は，文化秩序の領域から，体系化したり構造化したり論理を経由させづらいことがらを恣意的に取り除くことによって，その確立と維持とを目指す試み，そのものである．「創るべき・創る必要がある」という硬質な固定観念のもと，私は，排除の正当性をも同時に主張しているのではなかろうか．

人間が文化秩序を創る．

24．失われつつあるもの

前提とは，個人や集団の価値観の基盤であり，社会的な組織や個人の行動において重要な役割を果たしている．また，秩序とは法律，規則，慣習，規範といった多くの要素から成り立つ社会の安定と機能性の基盤でもある．なぜならば，同じ言語を使用していても，異なる前提や秩序を持つ人々の間には摩擦が生じることがありうるし，これらの違いは，社会問題を提起する要因ともなるからである．前提が効果的に機能するためには，人々が秩序に従う必要があるし，これらは個人の権利と責任を調整し，紛争や混乱を防ぐために不可欠なものともいえる．

言語とは，秩序を構築し維持するための強力なツールであり，文化や社会の発展において中心的な役割を果たす．つまり，言語は情報伝達，情報交換に不可欠であり，これを通じて社会的なルールや規範が伝えられ，人々はその中で自分の役割や責任を理解する．そしてまた，言語は紛争の解決や合意の形成にも役立つ．例えば，法律や契約は言語を使用して明確に定義され実行される．

以上のことから，言語は前提を伝達し共有するための手段である一方で，前提は言語の理解と解釈を形成する，と結論しうる．言語と前提は密接に結びついており，社会的な秩序の形成に影響を与えるということになる．異なる文化秩序の間で異なる言語と前提が存在する場合には，まずもって，言語を翻訳したり文化の違いを理解したりすることが求められ，これは利害関係や紛争を調整し解決するための大前提と言えよう．

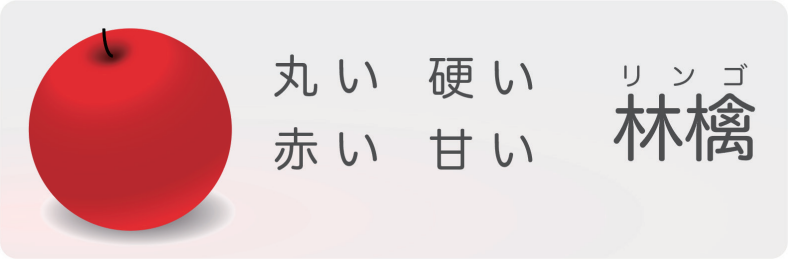
「秩序は言語を通じて前提を形成し，個人や集団の行動を規制する」
私にはこれは真の命題であるように思われるが，本邦ではここ最近こうした考え方が失われたように感じられる．なぜか．

まずは，ソーシャルメディアや短文メッセージングアプリなどの情報交換の手段が変化したことにより，情報の表現や伝達が短文化されたことが，喪失の引き金になったように思われる．こうした環境では深い議論や複雑な考え方を表現しにくくなり，秩序を形成する言語の力が制約されやすい．さらには，情報の氾濫や拡散，極端な意見の台頭など社会的な分断が増加したことにより，言語や価値観を共有することが難しくなった可能性が挙げられる．その結果，個人主義の傾向が強まり，自己表現が重要視され共通の秩序・言語・前提を受け入れる意欲が低下した，と推測される．

異なる文化や言語が交流し混ざり合う環境が拡がり，異なる価値観や競合し，秩序・言語・前提が多様化しているのが，現在の我が国の姿である．

25．主観と主観のあいだ

リンゴやバナナなどのように，子供のころから慣れ親しんでいるものについては，それが何であるかに関する自他の認識が一致する（ことが多い）．これは，人が色や品種など様々なリンゴを経験するたびに，そのイメージと言葉とを対にしながら，その全体を抽象化して記憶するからであろう．次に新しくリンゴを見たとき，具体的な要素を逐一照合させることなく，それがリンゴであると認識することができる．これが，「誰もがみなそう思う」と表現される分かりやすさの概念に通じているし，客観が成立するしくみでもある．



図：客観としてのリンゴ

主体である私は，ある事物_客体をみた時，それが何であるかを認識し理解する．主体の認識結果が主観である．認識するには，個々の主体の経験を通して，対象の存在が確かめられなければならない．別の主体もまた同じようにそれが何であるかを認識する．けれども，経験のしかたは主体毎に様々だし，その記憶のしかたもまちまちなので，自他の主観はそうやすやすと一致することはない．リンゴを見てリンゴと言うような一致を目指すには，同じ環境で，同じ言葉を用い，同じ経験を積むことが必要となる．

翻って，対象の存在は私の経験を通してすでに確かめられたのだから，そのような存在は一見して「客観的」と断じても差し支えない，と

感じる人は多いと思われるが，それが私にとって経験されているだけでは，まだそれが「客観的」であるとは言えない．なぜならば，私が経験したものが，みんなにとって経験されうるとは限らないからである．私にとってその事物が如何にありありと現れていたとしても，それを自他が共有するためには時空間の共有がどうしても必要になる．ある事物が客観的であるということは，それがみんなにとって経験できる事物であるということである．

ただし，個々の主体のすべてが，同じ事物を経験することは実質的には無理な話であろう．だから，「間主観性」の場にととどまり，経験の可能性を排除せず，「もし，この場にいればみんなが同じように経験してくれるはずだ」という IF の世界観 を持ち合わせることが，文化秩序のもとに生きる私達にとって大切なことである．

26. 濃度と秩序との関係

多くの分野において用いられる概念である濃度と秩序．これらの関係を理解することは，私達が特定の現象を理解したり評価したりする際に役立つ．

濃度とは，単位体積あたりの物質の量を表す指標であり，物質が特定の領域にどれだけ密集しているかを示し，通常は質量あるいはモル数で表される．濃度は物質の分布に関する情報を提供するとともに，物質の振る舞いや反応に影響を与える．濃度が高い場合，分子や粒子間の距離が近くなるので相互作用や反応しやすくなるし，異なる物質間での交換も起こりやすくなる．

秩序とは，システム内の要素や事象が特定のパターンや規則に従って配置されるだけでなく，合目的に振る舞うことを指す．秩序はある法則や規則に従って形成され，エントロピー（無秩序な状態の度合い）やネゲントロピー（negative entoropy）の概念とも関係している．秩序がなく混沌とした状態は，エントロピーが増大していると言える．

濃度と秩序との関係は以下のようである．

物理学の分野においては，原子や分子が特定の構造を持って配置されている粒子は秩序が高いと言えるし，不規則に配置された粒子は秩序が低いと言える．また，同じ物質であっても，固体相では原子や分子が規則的なパターンで配置され高い秩序を示しているのに対して，気体相では原子や分子がランダムに運動し秩序は低い，と言える．濃度が高い場合には，単位体積あたりの粒子数が増加することによって秩序ある形態を持ちやすくなるし，逆に濃度が低い場合には粒子間の距離が広がり秩序は低下する．

生物学の分野においては，例えば，細胞内の秩序は細胞膜や細胞質内の各要素に関連している．その内部の濃度変化は細胞内秩序に影響を与

える．細胞質内濃度が高すぎたり低すぎたりすると，細胞内秩序を保つことができなくなる．

社会科学の観点からみると，秩序は、法律，規則，文化，価値観によって規定され，個人や集団の行動に影響を与える．濃度，すなわち社会科学でいうところの人口密度や資源の分布は，文化秩序間の相互作用と深く関連する．

秩序と濃度には密接な関係がある．一般に，要素が高濃度で均一に配置されると相互作用が増加し秩序が変化しやすくなり，低濃度やランダムな配置では秩序の変化が起こりにくくなる．総じて，秩序と濃度とは相関の関係にあるといえ，両者は現象形態や事物の機能の安定性に深く関与しているものと思われる．

27．コントラストと秩序との関係

コントラストとは，要素の間の違いや対比を指す．差が際立つことによって，特定の対象や状況をより明確に把握できるようになる．

コントラストの意味内容は文脈に応じて変わる．

言語的な文脈では，単語，文節，文章の間の対比や違いのことである．例えば，対義語を使うことによって文章や会話にコントラストが生まれる．これは何かしらの内容を強調する手法のひとつとして用いられる．社会科学や政治学の文脈では，異なる社会，文化，経済，政治システムなどの対比や違いを指すときに，コントラストという単語が用いられる．論理的な文脈では，異なるアイデア，主張および論点の対比や立場の違いなどをいう．文学的には主題を際立たせるために，登場人物の性格のほかストーリーの変化がコントラストをもって描かれる．

視覚的な文脈では，コントラストとは色，明るさ，形，テクスチャ（質感）などの認識のしやすさのことを言う．例えば，白と黒は視覚的に高いコントラストを持っており，絵や写真，デザインを構成する際の重要な要素とされる．情報伝達と美的価値を両立させるために，秩序だったコントラスト技法が用いられることもある．例えば，一貫性のあるパターンを使用することで，秩序を保ちながらコントラストを強調することができ，これによりそれを見る者は情報を理解しやすくなる．

要するに，対称性，一貫性，調和性などとして代表されるコントラストは，要素を際立たせることによって秩序に安心感や安定感をもたらす．コントラストを調整することで，見た目の均衡を保つ役割をも果たす．そうすることによって，より効果的に機能し，共通認識が可能になる．

結果，コントラストと秩序とは，情報処理過程においてともに重要な要素であり，相互に影響し合う要素と言えよう．コントラストは要素を際立たせ注意を引くことができ，秩序は情報の整理と認識を補完する．両者を統合的に考慮することが，それを読む者，見る者，関わる者にとって理解しやすい情報を生成する鍵となりうるし，両者の適切な組み合わせが表現の成否に深く関わることになる．適度な秩序がないとコントラストが過剰に強調され，視覚的な混乱が生じる，ということでもある．

28．鮮鋭度と秩序との関係

鮮鋭度とは事物の鮮明さを示す指標のひとつである．鮮明度や解像度とも関連している．

エッジやディテール，つまり細部を鮮明でクリアに表現したり，感じたりする様子を私達は鮮鋭という言葉を用いて表す．例えば，「鮮鋭な秩序」，「鮮鋭な文章」，「鮮鋭な写真」というように，である．無秩序や混乱を防ぎ，企画あるいは役割が適切に設計され実行されている場合のポジティブ表現として用いられよう．鮮鋭な秩序のもとでは，無理や無駄がが最小限に抑えられるし作業もしやすくなる．

視覚的な文脈で言えば，格子状やハニカム状に配置することによって解像度を高く設定したカメラは鮮鋭度が高い写真を撮影することができる．イメージセンサーの解像度が高いほど，多くのディテールを捉えることができるためである．また，シャッタースピード，絞り，感度などの撮影条件もまた鮮鋭度に関連する．ブレやボケのない写真は鮮鋭度が高い．また，鮮鋭度を調整するために，演算フィルタなどの技術を利用した画像処理ソフトウェアや画像処理エンジンが活用されており，エッジを強調したりノイズを軽減したりすることができる．秩序との関連が深い．

言語的な文脈では，鮮鋭度とは内容が明確で，細部や要点の鮮明さの程度を示す特性のことである．鮮鋭な文章は，読者にとって理解しやすく，内容が迅速かつ効果的に伝わる．曖昧さが排除され，適度に繰り返し表現を用い，セクションや段落を整然と配置することによって，全体の流れが把握しやすくなる．ただし，鮮鋭度はコンテクストによって変える必要がある．学術論文や科学的な報告書では，一定の論理構造のもと，専門用語や業界固有の用語を適切に配置するという意味での鮮鋭度が求められるし，小説や詩では，時代や季節の描写のほか，心の機微や

葛藤を豊富な語彙で表すといった意味での鮮鋭度が求められる．

鮮鋭度はコミュニケーションとも関連がある．鮮鋭な論理は説得力があるし， 是非が鮮鋭に示されたコミュニケーションは問題や課題を迅速に整理することができる．逆に鮮鋭にすぎると，聞く者の理解を妨げたり，反感を生むきっかけにもなる．

このように，鮮鋭度は鮮明度や解像度と深い関係にある指標である．これらは高ければ高いほど良いというわけではない．鮮鋭度を高くすれば，主題とまわりとの境界が鮮明になり印象的になるものの，鮮鋭度を上げすぎると，どぎつさが感じられたり不自然に見えることがある．

29．粒状度と秩序との関係

データや事実は，文字，表，図で表現される．情報である．私達は日常生活や仕事，学術研究などあらゆる分野において，伝え手として，また受け手としてそれを利用している．

情報を交換する際に求められることは，その真偽や出典，伝達速度，そして細やかさの水準であろう．よってここでは，詳細で具体的なものか，簡便で一般的なものか，などという細やかさのありかたについて述べてみたい．一般に，技術，科学，医学，文学，経済学，哲学などの専門領域では詳細な情報が重要とされるし，秩序としての細か量の水準の選択は，情報管理，コミュニケーション，意思決定に影響を与えるからである．

粗粒度情報：
要約や概要のことである．個別具体的な詳細な情報は無いか省略されているもので，全体を大まかに伝え理解する際に役立つ．基本的な枠組みと言ってもよい．例えば，国の名前や人工，地域別の日毎の天気予報などのことである．会議や催し物の名称，日時，場所などもこれに含まれよう．

中粒度情報：
粗粒度情報と細粒度情報の中間に位置し，多くの場面で利用される．これには一般的な概念に関する詳細が含まれる．一般的な情報を提供しつつ，部分的に詳細情報が含まれる．空間そして時間的にある要素と要素を比較したり，意志決定したりする際に役立つ．例えば，ある国の文化や経済状況，時間単位の天気予報などである．会議であれば，議題や過去の議事録などが中粒度情報に含まれる．

細粒度情報：

非常に緻密で詳細な情報のことである．これには，特定の事実や時点に焦点を当てた内容のほか，それが生成された背景や経緯に関する情報も含まれる．細粒度情報は，専門家や研究者にとって重要であり，例えば特定の生産物の部品設計・組み立て・品質管理の工程や，科学的研究の実験データなどが挙げられる．個人情報もこれに含まれよう．

情報粒度は，受け手が求めているものか，受け手が理解しやすいものか，のほか，伝達し処理するための労力と経費面を考慮して選択する必要がある．伝え手は受け手が求める細やかさの水準を把握したうえでそれを提供することが肝要である．すなわち，秩序に応じた粒度選択が必要であり粒度が秩序を左右する，とも言える．粒度を粒状度と言い換えても良い．

30．範囲と秩序との関係

範囲とは，特定の研究や議論が対象とする領域のことをいう．目的によって異なり，広範囲なものから狭い範囲まで様々である．範囲を明確にすることは焦点を絞り，問題の理解に役立つ．秩序とは，整然と配置された構造やパターンのことを言う．これは，事物やプロセス，そしてその結果としての規則性や組織性のことである．

範囲と秩序は，多くの局面で共存し相互に影響しあっており，範囲と秩序はともに自然や文化において重要な要素であり，それらには深い相関関係がある．

（範囲としての） 自然界には，（範囲としての） 生態系があり，これは多様な動物種種，植物種，環境要因から成り立っている．同時に，これらは，食物連鎖や生態ピラミッドのような生態学的な法則に従って相互に作用しており，こうした秩序は生態系の安定性と持続可能性に寄与している．

（範囲としての） 人間社会もまた，異なる文化，異なる価値観，異なる人種，異なる宗教など多様な要素で満ちている一方，社会は法律，規制，規範などといった秩序によって制御されている．これによって社会の安定性や公正性が保たれる．一例を挙げてみると，交通法規があるので，交通の混乱を少なくし，事故を未然に防いでいる．

様々な表現法やスタイルがある芸術には，無限の範囲があるように見えるけれども，ここにも色彩の調和や構図のバランス，物語の構造などの秩序がある．同じく，科学では様々な範囲のデータと情報が見られるが，それを整理するための秩序が必要になる．経済においても，法律のもとの競争や供給と需要の法則という秩序によって，（範囲としての）市場に商品やサービスが提供される．

図：範囲と秩序との関係

範囲と秩序の均衡が崩れることもある．範囲が過度に広がると混乱や無秩序が生じる可能性があり，逆に秩序が過度に強調されると創造性や柔軟性が損なわれる可能性がある．両者には互いに因果関係があり，緊密な均衡関係にあるとも言えよう．両者の関係を知ることは，持続可能な発展の鍵となる．自然界から人間社会，芸術から科学，そして個人や集団の成長まで，さまざまな領域で私たちの生活に影響を与えるものが範囲と秩序である．

範囲を拡大することで新しい可能性が生まれ．秩序を持たせることで効率性や安定性が確保される．

31．角度と秩序との関係

レオナルド・ダ・ヴィンチ（1452-1519）は，画家に必要とされる局所解剖学の知識として人体の内部構造を描いていたという．レオナルドは，芸術や視覚に関する理論そして絵の技法に関連して，こう言った．

「ものには輪郭がない」

極論に感じる方が多いかもしれないが，この言明は，角度を変えつつ事物をよく見ること，つまり，事物を多面的に洞察することの大切さが示されているように思われてならない．私は，輪郭を先に描かない方法のことと理解しているが，こうした考えに基づいて描かれた陰影技法のことを「スフマート」あるいは「レオナルドの煙」と呼ぶらしい．

事物を特定の角度から見たとき，調和がとれ，物事が秩序立っているように見えることがある．これは，安心感や美しいという観念を経由した認識なのであろう．対称的なデザインや調和的なパターンは秩序のあるものとして認識しやすい．これは，それが美的な魅力を持っているからである．

ただ，私達は視覚的に情報を取得する際，ひとつの角度から眺めるだけでなく，さまざまな角度から事物を眺めることもできる．そうすることによって，同じ事物から異なる情報を収集できるからである．果物を前から見た場合と横から見た場合ではその形状や輪郭が異なるし，光の当てかたによっても輪郭は変化する．視野角を変えることでも輪郭は変化する．

例えば，ひとくちに，「丸い」と表現する物体も，拡大してみると，実はわずかな凹み（へこみ）や凸み（つばくみ）があり，幾何学的な正円ではないことがある．これは，整然とした規則性があるように感じても，みかた — 角度 — を変えると，そうではないと感じる可能性を示

唆している．逆に，ある秩序に従ってあらためて観察すれば，一定の規則性を見いだすこともできる．

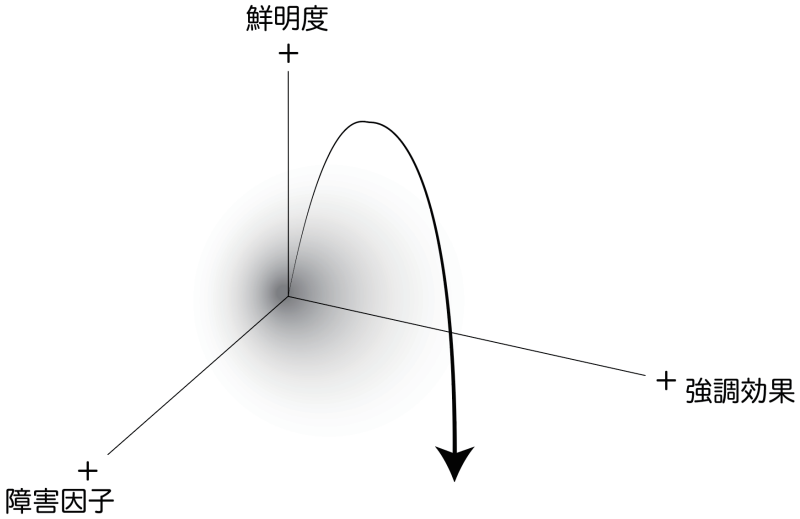
自然や人にカメラをむけた時，特定の角度や視野角でそれを切り取りたい，と思うことがある．それは何かしらの秩序観がそなわった感性のようなものが，私達の感覚を惹きつけていることの現れなのであろう．惹きつけられたとしても，いつもうまく撮影できるとは限らない．繰り返し，繰り返し，挑戦することが大事である．

図：三峯神社からみた秩父の山　2023年10月8日

32．鮮明度と強調効果と障害因子と

その試みに客観の名を冠することができるか否かはさておき，視覚情報としてのイメージは一定の秩序，そして主観性あるいは間主観性のもとに，鮮明度や強調効果や障害因子などという様々な用語に変換することによって分析できるように思われる．ここではその第1歩目としてそれらの関係を考えてみたい．

鮮明度とは，イメージの鮮やかさや明らかさの程度のことである．ふつう，情報そのものならびに情報間の関係性が捉えやすいものが鮮明度が高い，と評価される．認識しづらいものは鮮明度が低い．



図：視覚情報における鮮明度・強調効果・障害因子の関係性

強調効果とは，あるイメージを強く訴えるように表現しそれを引き立てる度合いのことを言う．効果的に強調されていれば ― 強調効果が高ければ― 情報が際立ち，それを観察する者の注意を引き付け，認識しやすくなる．すなわち，強調効果と鮮鋭度には正の相関関係があると言えよう．ただし，過剰に強調されていると，鮮明度は逆に低下する．鮮

明過ぎると生の情報が平板的に表現されてしまう．数値データを平均すると個々の情報が隠れてしまうこととよく似ており，ある閾値以上になると負の相関関係におきかわるということである．

障害因子とは一般に，「悪い」という意味のネガティブ因子として捉えられているもので，鮮明度を低下させる要因である．障害因子が多ければ鮮明度は低下するので，両者には負の相関関係があるといえよう．ところが，一定の障害陰影は，二次元情報において立体感を強調しよりリアルに見せる効果をも有している．この相においては，障害因子と鮮鋭度とは正の相関関係がある，と言えよう．

なお，強調効果と障害因子はトレードオフの関係にある．障害を気にしすぎると強調させづらくなり，強調しすぎると障害因子が多くなる．一つの要素を意識しすぎると，他の要素が犠牲になるということである．

以上のことから，適切な強調効果と適度の障害因子を有するものが，鮮明度が高い情報ということになろう．両者の関係は，情報伝達や各種の判断において，相互に補完的な役割を果たす関係であると同時に，対立する関係でもある．

33．秩序構築における前提の役割

ユークリッド幾何学は，数学の分野において重要な位置を占めており，その中核には公理，定理，および論理的な推論がある．この学問は古代ギリシャの数学者ユークリッドによって発展したものであり，議論や証明の原点と言えるものでもある．公理があることによって定理が導かれ，力強く推論や議論を進めることができるというわけである．公理の一貫性が欠けたとき，その体系や議論全体が崩壊する可能性がある．そういうことから，私には，公理や定理の意味内容は前提という言葉のそれとよく似ている，ように感じられる．

公準とも呼ばれる公理は「秩序全般」を構築する上で極めて重要な役割を果たす．体系の安定性に関わるからである．幾何学で言えば，その基盤を成すのが公理である．真実とされる命題の集合であり，それ自体は証明の対象ではない．ユークリッドはその著書において，空間や幾何学的対象について5つの公準を定めている．例えば，「任意の2点が与えられたとき，それらを端点とする線分を引くことができる」というものがある．他には，「与えられた線分はどちら側にでも，延長する事ができる」などがある．

公理が確立されたら次は定理を証明する段階に進む．定理は公理に基づいて導かれる命題であり，数学的な真実を表現する．ユークリッドは公理を基にさまざまな定理を証明した．言い換えると，公理に従って論理的に展開され，論理と証拠に基づいたものが定理である．定理の証明は数学的論証の基本であり，ユークリッド幾何学において特に重要である．幾何学的問題を解決する手法やアルゴリズムの開発にも貢献するなど，この分野の力強さを示す要因の一つであるからである．

公理や既に証明された定理から派生し，範囲や条件として示される前

提は論証全体の正当性に影響を与える．すなわち，論理学の一般原則である一貫性と完全性とに関連している．

病理学者である中村恭一は，「胃癌の組織発生」を導くに当たり，以下の4つの前提を示した．大前提とも言えるものである．

ここに記して，このたびの私の論考を締め括ることにしたい．

胃癌の組織発生を導くための前提（中村恭一による）

I.　癌はそれが発生した臓器の構造・機能を多少とも模様している．

II.　癌は時間の経過とともに大きくなる．

III.　胃の粘膜は本質的に固有粘膜と腸上皮化生粘膜の二つに類別できる．

IV.　胃の粘膜は定常的ではない（F境界線の経時的移動）．

秩序と関係に関する 33 の覚え書き
2023 年 10 月 14 日 発行

著者　吉田諭史
発行・編集　馬場塾オンライン
富樫 聖子
梶本 昌志
佐藤 清二
安藤 健一
印刷所　株式会社 エス・エス・エー

Copyright © 2023 Babajuku Online. All rights reserved.